



まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

発行/昭和62年10月15日 No.1

編集/(財)愛媛まちづくり総合センター



特集 — イベント裏ばなし —

「されど我らが日々」てんやわんや王国

「名物にしようぜ!」溪流上り駅伝大会

「イベント男」のひとりごと

紙まつり後記

金太郎飴イベントをやってみて

'87滑床まつりを終えて

“イベントはゴキブリホイホイだ”

四国カルスト五段高原発信

サンセットクルージングin宇和海

ふるさと夜市

大分県下郷農協見聞記



VOL

1



てんやわんや王国が誕生して五ヶ月。四つのイベントをこなしました。知恵と汗の出っぱなしの五ヶ月間でした。

四国西南磯釣り大会——今年で二回目。いやあ！久しぶりの徹夜でした。高松、高知の遠来の釣り人を含めて、集まった太公望が二七〇名。早い人は夜中の一時すぎから到着するので、受付は寝ずの

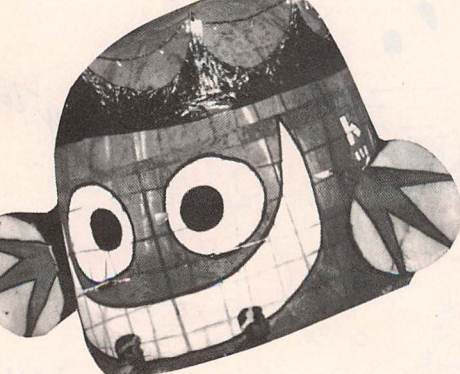
てんやわんや王国・津島町

大統領 小野芳洪

されどわれらが日々

準備。それから出航の五時までは、まさに「てんやわんや!!」……出航を見送った時は「万才!!」と叫びたくなりました。好評だったのは、巡視船で各磯廻りをし「けがをした人、体調の悪い人はありませんか?」とか「ガンバッテ下さいヨ!!」と激励の声を掛けた事。失敗は「うどんコーナー、おにぎりコーナー」。昨年「食べる物は無いか」という太公望が多かったので、てんやわんや王国の通産省のメンバーと地元の人達とのタイアップでテナントを出したのですが、案内状を発送した後の発案のため、太公望達は途中で食べたり、買ってきたりで、ワンサと余ってしまいました。来年はカシコクナルゾ!!

「87サマーライブINつしま」——夏祭りの前夜祭と考えてのロックコンサート。新しい試みで燃えに燃えてのチケット売りでしたが、不慣れの為不確実要素大で、予定通り運ばませんでした。最低五、〇〇〇人のつもりが、三千人。しかし、エネルギー大臣（町連合青年団長）を軸として、各業界の後継者達がスクラム組んでの共同作業は将来、大いなる財産となりそう!!



つしま夏祭り——例年の実行委員会から「てんやわんや王国」が引き継いで主催。一万五千人の観衆を満喫させる一大パノラマを演出し大成功でした。岩松川を徹底的に利用し、会場を「お祭り河原」と命名し昼間は「横山やすしもびつくりポート」「丸太切り大会」等子供達主体、夜は歌謡ショー、いかだ上り、花火をメインに、街中を「ミスてんやわんや」のパレードをし、先頭は自衛隊のブラスバンド、後続は地元婦人達子供達の舞踊行進で、お祭り河原に集結。例年より人の集まりが良かったのはミスてんやわんやの認証式を国王（町長）が手渡したこと。早い時間から人の波が動き成功でした。圧巻はイカダ上り。ねぶた祭りを模した本格的なもので観衆も大喜び。問題点は、準備期間中、コンサートチケット売りを並行したこと。終わった時は皆グロッキー!! 苦行の三ヶ月でした。来年は並行

はダメ！少し期間をおいて、一つに全力投球だ！！

ファミリー釣り大会——今年で二回目。開会式の中で「釣りのマナー教室」を三十分したのが今年も好評。海を仕事場にして人達と釣り人達とのトラブルを耳にする昨今ですので、釣りのメッカである宇和海を控えている我が町から、きれいな海、愛する海をモットーに「海はみんなのもの」を訴えていくのがねらいのイベント。参加者が少なかったのが反省点。イベント続きで、根廻し不足は否めない。夏休み中に……という配慮は要らないことに気がつく。来年は九月〜十月頃でもよいようだ。始めて釣りをした小さな女の子が、五m位のグレを計って下さいと両手に乗せて一生懸命人波の中で頼む姿に、審査員「涙が出る程シーンと来た。審査に来て良かった。これがファミリー釣り大会のええとこや！！」

五ヶ月間の嵐の中をくぐって来

て思う……「イベントって何だろう？」

人と人との触れ合いから生まれる『共感』の輪を拡げること……。たくさんの人達が、一つの目的に向ってスクラム組んで、汗を流して共同作業をする中から生まれる「仲間意識」「パワフルなエネルギー」……。この活力の輪をシワジワ広げて、皆で参加するムードを作る。……そこに「むらおこし」「町づくり」の原点があるような気がする。だから、派手さに惑わされず地に足着いた「イベント」を見出すまで、しんどくても、いろいろなして行きたいものだ。それが、自分の子供達の時代に残していく大いなる財産である事を信じて……。『されど我が日々』で、今まさにてんやわんや王国のエンジンは全開！！

いうた子、いかんちや……の話

「この盃、三個三千円は高い、半分にならない……？」高知の日曜市で浜野さんは、並べられた手づくりの焼き物を冷やかした。すると露店の爺さんは、その盃の一つを取り上げ、自分の目で確かめるように裏表とじっくり見詰めた後、「おまはん、この盃やあ何処からも半分に切れんぜよ……」と一言。浜野さんの負けだった。

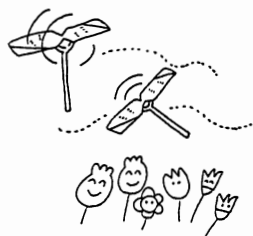
今度こそはと別の露店で、風糸を引っ張れば、ヘリのように羽だけが飛ぶ手製の竹トンボ一つを見つけた。幾らだと聞くと千三百円と言う。千円に負けると言ったとたん、店の親父は、後ろの荷をゴソゴソ探して同じ竹トンボ二つを出し、近所の七十三の爺さんが「子供たちのために……」と、日曜市ごとに一週間がかりで三つづつ作って持ってくるんだ。

「それを、おまはん値切れるか……」と。

浜野さんは言う。「日本国中、何処へ行っても聞けなくなった、こうした愉快な会話が土佐へ来ると出来るのでホッとする……。だから私は、土佐が懐かしくてまたやって来る……」「土佐には自然が一杯だといっても、グローバルに見ればたいしたことはない……」「従来型の観光イメージを捨て、また来なくなるような土佐人の暮らし方づくり、心の風土」づくりが大切だ……と。

この話は、浜野商品研究所の所長浜野安宏さんが、さる九月十三日、JC高知ブロック協議会の主催で、県内の地域づくり活動者を集めた『国民休暇県高知推進フォーラム』の基調講演で語られたワン・カットである。

確かに、焦点は「リゾート開発」に向けられてはいたが、本物の『地域づくり』の原点を、愉しく傾聴させて頂いた想いであった。愛媛県まらづくり総合センター／宮本俊一





“名物にしようぜ!! 溪流上り駅伝大会”



広見町を元気にする若者会

会長 青芝秀實

昨年の商工会青年部の忘年会での事からこの話は始まります。来賓の町役場産業係長（私と幼なじみ）が、突然「おい、お前ら何かおもしろい事せんか？」というのです。「何でもいから、広見町という名前を売り出してくれんか」とも言い、詳しく話を聞いて、十名の仲間がこの事を伝えたのです。もちろん、この時全員「大虎」になってはいたのですが……。そして四日後、今度は「しらふ」で十名集まり、何にでも馬鹿になり、ユニークな発想でユニークなイベントを行う事を目的とした、勝手連「広見町を元気にする若者会」が結成されたのです。

さあそれからが大変。どうやって広見町を

売り出し、広く町外の方々に知ってもらうか、色々と悩まない頭、形だけの頭をつき合わせ考えた結果、地元「成川」の溪流を走って上ろうかという結論に達したのです。

優勝賞金十万円と決め、色々と予算を出して、さあ資金作りから始まりました。寄附集めをして、何とか準備OK！寄附を集めている頃、色んな話が僕の耳に入ってきました。「あい

つら、金を集めて飲むつもりじゃないのか？」と、でも僕達は例会を行ってもジュースしか飲まずに、夜遅くまで話し合いをしました。コース作り、川の中の草刈り等は毎週日曜日に集まって行いました。時には雪がちらついたりもしましたが……。(本当に泣きたくなる事もありました。)そしていよいよ当日がやって来しました。前日の雨もすっかりあがり、まずまずの天気。最初は闘志むき出しだった各選手も、待つ間にすっかり仲良くなり、和気相々で行われた事が、大変嬉しかった。来年も又、参加するぞ！という声が返ってきた時には、色んな苦労が一度に吹っ飛び次はどんな風に選手をいじめてやろうかという考えも、浮かんできました。

資金集めから始まり、他の人には色々とばやかれ、町の人にははげまされ行った「溪流上り駅伝大会」。ずーっと広見の名物にするつもりです。皆様もぜひ参加して下さい。とてもおもしろいですよ。

今、我々若者会は「広見は一つ」を目標にユニークな事を考えています。乞ご期待！

『イベント男』のひとりごと

双海町 若松進一

「イベントは夏の夜の花火に似ている」としみじみ思う。事実、今まで静かだったまちがにわかに活気つき、人はその興奮に酔いしれる。でも何故か、あれ程元気だったまちや人もイベントが終ると、まるで昨日のことがまったく嘘の様に精気を失ってしまうから不思議である。我々はこの実態から一体何を学



ふたみの夏まつり

紙まつり

—後記

第10回四国かわのえ紙まつり実行委員長

谷井 登

川之江には、四国かわのえ紙まつりという毎年7月最終土、日に開催される当市最大のイベントがあります。

「紙で心をむすび ふれあいの輪を広げよう」というテーマのもと、今年で記念すべき第十回目を迎えることになりました。

当市は江戸後期に始まった手漉和紙で栄え、現在に至っても工業生産高の八十%以上が紙関連という文字通りの紙の町です。地場産業をテーマとした祭りは非常にめずらしく、そういった意味でも割と県内外に着目されてきました。しかしながら、第十回目ともなると、定着してきたがゆえに、マンネリ化の声も聞こえていました。紙まつりには二つの弱点があります。一つは紙を素材とするゆえに雨に弱いという事です。これは長年の経験で不織布を多用するなど対策を講じて参りました。もう

一つは真夏の祭典という事で昼間の暑さ対策でした。ギラギラする太陽の下で、昼間のイベントの盛り上がりは今ひとつでした。十周年の試みの一つとして、マンネリ化を打破する意味でも直射日光を何とかしようと考えました。そこで登場したのがアドバルーン十数個によって打ち上げられた、縦二十五メートル、横三十メートルの大型テントでした。計算上は、上がる予定ですが、何が起るかわからないのが本番です。リハーサルなしに当日早朝より準備にかかり、打上げの一瞬を見守りました。

なかなか目一杯まで上がらず、風によって張ったり、緩んだりという繰返しでした。私の心配をよそに、その都度形が変わるドームが好評を得、又、予想以上に大きな影ができた事が、昼間のイベントを盛り上げ、十周年の紙まつりを大成功裡に導いた大きな要因であったように思います。夜は年々盛んになる紙おどりが控えておりますので、来年以降非常に見通しが明るくなったように思います。

我々はこの大型テントの発案者であり、副実行委員長でもある岡田君の名前をとり、今後オカダドームと命名いたしました。



べばいいのだろう。

イベントは、そのまちにある（共有）を最大限に生かし、そこに住む人達が（共考・共同）の力で（共働）し、（共感・共鳴）を得ながら、そのまちを元氣よくしていこうとする営みであるが、今のイベントは（共有）も（共考・共同）も、（共働）も、ましてやそこから派生する（共感・共鳴）や（共栄）も殆んどない。それは、イベントを構築するためのプロセスの過程で、手抜きやあなたまかせに終始しているからではないのか。

あれやこれや考えると、もう少し違った角度や視点からイベントのあり方を考えないとまちおこしやむらおこしの役割を果しえるイベントには成長しない様な気がする。

双海でも、海しかない条件を逆手に取り、徹底的に海にこだわって、海をテーマに双海でしか出来ないイベントを数多くこなしてきたが、やっと長いトンネルを抜け、共働の中から共感・共鳴を呼び、新しい次への芽吹きがみられる様になった。

イベント&まちづくりも、玉子が先かニワトリが先かの論議がいつも先に立ち、やれ行政先行とかやれ住民主導とか、とかく水かけ論議に終始することが多いが、要は気がついた人が気がついたことを社会にゆきぶりをかけながら実行することだと思ふ、そうすればイベントがまちづくりにとって、なくてはならないものになることであろう。

そのまちになくてはならない人間になることはむづかしいがたやすい。

金太郎飴イベントをやってみて

中島町商工会 松本彰二



とにかく多くのイベントが各地において開催されている昨今である。都市において然り、いわゆる過疎地と呼ばれている様な町村において然り。特に後者において開催されているイベントはスポーツのイベント、コンサート夏祭り、その他であるがどれもこれも同じ顔をしている。イベントの名前こそ違え個性がない。そこで金太郎飴イベントなる言葉が生まれてしまった。

中島町においても、今夏第二回目のトライアスロン大会と第三回目のサンキュー、マイカントリー、コンサートを開いた。大切な事の一つは、これらのイベントを金太郎飴イベントにしない事である。そのためには、このイベントで何をしたいのかという事が明確である必要がある。中島の何を表現したいかという事が初めにないと金太郎飴になってしまう。堺屋太一氏は「何をするか(What)は主催者が定めることだ。どのようにするか(How to)は専門家に任すべきただ」、というような事を言っている。これは正しいと思う。但し、このように出来るかどうかという

問題は別の問題であると思う。都市で開かれているイベントにおいては、いざ知らず、我々が行う場合は、この問題こそ大問題になって来るような気がしてくるのだ。

Whatを考えているつもりが結局How toに終始している内に終ってしまっていたという感じなのだ。この事について悩まないわけでもないが、テーマがあって実行するイベントもあるが、やってみて行かぬ程でテーマを探すイベントがある。こう考えれば金太郎飴イベントの主催者も少しは気が軽くなるのでは？しかし、何回かやっていると、ふと予期しなかったようなハプニングが起きるもので、子供が選手と一緒に走り出してそのままゴールインしてみたり、部落中の人が冷蔵庫から氷を持ち出して選手に渡していたという話を後で聞いたり、パーティーの時の食事が意外と好評であったり、ああそうかと思うような事が次々と出て来るのである。将来の中島のあるべきイベントを示唆しているのではないかと思われる事が出てくるのである。詳しくは企業秘密であるので触れない。だんだんと金太郎飴ではなくて来ますので乞御期待！という所です。



ゴールをめざし鉄人たちがいく





ふるさと川下り「イカダレース」

'87 滑床まつりを終えて

松野町まちづくり青年会議

会長 井上六廣

「'87滑床まつり」も、森の国音楽祭（小比類巻かほるコンサート）を、フィナーレに、無事、終了する事ができた。

総括的にふり返ると、例年と、あまり変らないものであったように思う。

しかし、「ふる里川くだり」では、各商店の協力が得られ、賞品の充実が出来たため、成績に対しての他に、参加グループの全艇に、抽選により、何らかの商品を、呈する事ができた。羽根布団・洗濯機など、高価なものから、エィズ防止用品まで、多種類だったが、その抽選がおしく、爆笑もあり、参加者が一つになり、喜んでくれたと思う。

だが、溪谷でのイベントは、マンネリ化して、参加者が少なくなっているのではないかと考える。これから先、滑床に合った、素朴で、新鮮味のあるものに、どしどし変えて行くべきではないかと反省するところである。

さて、一番、大変なのが、音楽祭である。中でも、アーティストの選考が、まず最初であるが、何分素人なので、いろいろと、問題が生じてくる。今季、三回を迎えるにあたって、費用の面で出演者が、二転三転し、ようやく決つ

たと思うと、チケット売り出しの前日になって、前座の新人が、プロダクションの一方的な考えで、出演拒否をしてきた。その為、チケットの刷り直しや、売り出しの一週間遅れで、費用も嵩んでしまった。資金のない我々にとって、非常に、困ることである。しかし、それも切り抜け、無事コンサートを開演したのである。

結果、チケット販売枚数が、予定に達せず赤字を生む事となったけれど、「五百人集まるかどうか」という心配もよそに、千五百人という若者が、集まってくれ、感激したものだ。何より、町をはじめ、各方面の協力を受ける事ができ、目標の達成に、近づいてきた事が嬉しい。仕事も、家庭も、犠牲にしてやってきたが、周囲の暖かい仲間の、見守りもあり、この音楽祭を、今以上に、各方面から、喜んでもらえる様、続けて行こうと、勇気も湧き、誓いを新たにしたのである。



ゆかた美人コンテスト

南予の和太鼓競演



イベントは

ゴキブリホイホイだ

五十崎藩の戦士

松本 寛次



五十崎のかぐや姫と
みやんじょチクリン村のかぐや姫



町長さんもちょうちん行列(左)

では、問題です。

「いま日本中の若者が、先を競ってむさぼり読んでいる新刊書は、何くんだ」

(A)『サラダ記念日』——と答えたあなたは、いろいろな意味でまじめすぎです。愛とか恋とか、自分の心の動きに執着しては、年賀状は増えません。

(B)『宇宙の創り方教えます』——と、ためらいなく答えたあなたは、情報量といい、志向性といい、かなりの「すぐれ者」です。

この本を書いた人は、現在、千葉県農業大学校で「はぐれ教官」をやっている、五十才になったら、パングラディッシュで農業をしますとヤバイことを口ば

しっている、ホッカホッカの中華まんのような、妖しげな存在なのです。名前はちなみに小松光一さんです。

『何事もいいんじゃない』と言ったのけウソつき ホラ吹き人間になろう』とか、『下半身の農業観』とか、『宇宙遊泳的人脈結合とかいう、われらの荒ワザを見よ!』とかまあ、少くとも、『この舞・たうん』を読もうと考えている人は、この本に出てくる「山武のガイキチ集団」の、ゆきあたりばったりでまかせハチャメチャおもしろグループの活動を知れば、なんか元気がでるんじゃないの。責任は一切持ちませんので、だまされたと思って、読んでみては? 富民協会、定価は一、〇〇〇円です。

この夏、五十崎の主役は、商工

ザ・談会

JRつしま駅発各駅停車

津島ゆき

——今晩は、お疲れのところお集まりいただき、ご苦労さんです。新聞などで拝見しております、みなさんの町でも最近、むらおこしが盛んにおこなわれているようですね。本日はそのあたりのことについて、しばらくの間、お話しを願ったと思います。

商業

繁夫 私どもの町では昭和六〇年に、兼六園の一・五倍もある庭園が開園し、観光の一大拠点となっております。四季折々のシーズンには驚くほどのにぎわいで、車と人の黒山になります。しかし、残念なことに、その黒山も夕方には町を後にしてしまうのです。商店街筋は国道から河川を隔てて距離があり、帰り客の車は街筋を通ることもありません。

このような状況の中にあって、私たちは遅まきながら委員会をつくり、この町で自分たちに何ができるのかといったことで、各方面に掘りおこし活動を始めております。

——なるほど。そういえば私、つい先日、ある方と話しておりましたら、その方がこういっておいしました。「南予はおくれている。ものめずらしく人が行く」ではダメですねえ。」

繁夫 これはまた手厳しいことをおっしゃる方ですねえ。しかし、今の状況を考えますと、私たちが商店街を思うとき、地域というものをマクロに、真剣に問うていく視点が大切になってくるんでしょ

商業



ちようちんぎょうれつ

会青年部でした。

七・二〇 かぐや姫カラオケ大会、八・一四 かぐや姫まつり前夜祭・小田川河原にて野外映画祭で、『風の谷のナウシカ』を上映
八・一五 かぐや姫まつりで、鹿児島宮之城町から「かぐや姫」を招いて、両町の友好親善の橋渡しをする。と、いった具合です。

テレビ愛媛に出て、実に下手な演技をマジでやったのも、新聞各者のインタビューをドギマギしながら受け、思わずグチったり、とにかく、どうせやるなら派手にやろうや、と頑張ったものです。

そんなことをするために商工会に入ったわけではないのに、なんでそんなに頑張ったかという、やっぱりオモシロいんですね。

中学校へ出向いて行き、五十崎町の祭りを盛り上げるため、ブラバンド部が先導して下さいよ、と今まで関係がないと傍観していた人も、シャニムニ、祭りへ引き込んでしまう、そんな罪と罰の罪悪感。

五十崎町の特産品をPRする場にしますから、映画のフィルムリール料を出して下さいと町に頼みこ

む、ダマシのテクニク。

あんなに歌が上手なんだから、カラオケ大会には是非にと持ち上げる、二枚舌。

日頃、県議です町長ですと言っ
て一段高い所にいる人に、自分達と一緒に提灯をかついで、まだ奇異な視線もある人ごみの中をねり歩く、シギャク感。

このどれもが、やってみると端で見ている時より、実に、楽しいんですね。

相手もそのうち、ええい！またこいつらか、この際ダマされたふりしてやれ、と調子を合わせてくれたり、ホモサピエンス・ヒトの暖かみを感じたりして。

だから、イベントは「ゴキブリホイホイ」だと思ふのです。

誘引剤でグツと引き寄せて、折角集まった変わりビトを、確実に引き止めて、翌年はもっと大きな「ホイホイ」を仕掛けて、新たな獲物待つもんなのです。

どこかの商工会議所のように、イベントを火花にしましては、もったいないオバケが出ます。地縁と知縁の広がり求めて、イベントを有効に使いましょ。自治省からの資源節約PRを終ります。

漁業

うねえ。「おまえ、それやれ。おれは、これする。」の発想では行き詰まることになるんでしょねえ。

洋子 同感です。私も主人とよく話しているんです。今まで通りのやりかたをしていたのでは、厳しい情勢を乗り越えられずに、自滅するんじゃないかと。

——そういえば、宇和海にも泳げない海があるんだそうですね。

洋子 これ自己反省的ですけど、密殖や生活排水やらによって生産基盤である海がひん死の状態になっています。この状況といえますのは、もはや義務的、形式的、ワンパターンのクリーン作戦ではどうにもならないところまできています。この状況、いわばマイナスの状況を私たち自身が内在化することによって、今こそ地域ということを考えていかなければという思いになっています。

——汚染の問題は海に限ったことではありませんね。小田川が流れる風のまち五十崎という地域では、この問題にいち早く取り組んでおられます。

いろいろな人たちが、「川を美しく」、「川を考える」と一生懸命になっており、自腹をきってスイス、ドイツ、フランスにまで勉強に出かけ、河川工事の工法に自分たちの思いを反映させています。そういった活動は、「美しい自然・美しい人・美しい産業」といった広がりとなっており、いろいろな方面でいろいろな人たちが動きまわっています。地域が美しく輝き始めています。

米雄 米の問題も今年は特に厳しい生産調整となっております。一方では生産規模に合わない機械化が進んでおり、農業に代わって新しいものが次から次へという具合で、使い過ぎが問題となっております。

農業



四国カルスト

五段高原発信

柳谷村青年団 中野克仁

フェスティバルin四国カルスト。

四国カルストの雄大な自然の中で、生の音楽を聞きたい。六年間に村の青年団が、手造りのステージを

つくり、フォークロック野外コンサートを開催したのが、このイベントの始まりだ。

三年前、間伐材を利用した野外ステージを村が、つくってくれた。

それによってステージ造りに費やしていた青年のパワーをどこでどう燃焼させるか、又マンネリ化してきつつあるフェスティバルの活性化等を話し合い、柳谷特産の黒牛和牛の肉を食べてみようということ、バーベキューまつりなるものをやってみることにした。

流通の関係で、ほとんどが大阪周辺で高く売られているという黒牛のうまい肉を食べながら、野外コンサートを見たり聞いたり、あめご、でんがく、焼きもちなどの柳谷のふるさとの味を食べたり……。会場いっぱい肉のやけるいいにおいが拡がっている。

第六回になった今年のフェスティバルにうれしい参加者がいた。それは、呼びかけもしないのに前夜祭の輪の中にいた、高校生たちだ。

無口なくせに、一宿一飯の恩を感じたのか、当日は準備から後片付けまで手伝ってくれた。猫の手ならぬ牛の手まで借りたい中、貴重な戦力となった。青年団と一緒に活動してくれて、青年団について何かを彼らなりに感じとってくれ

林業

ります。農業もこのあたりで一息ついて、栽培方法、病害虫の生態と農薬の問題などについて考え直してみなければならぬように思います。

一樹 われわれの問題はもっと深刻です。サイクルが長い訳です。今年植えたものが数年先に製品になるということがありません。長い間じっと我慢しなければならぬんです。やつのことで製品にできるようになっても、伐る手間もないというのではどうしようもありません。

漁業

——のんびり、のどかな町なのですが、聞いておりますと実際には厳しい状況があるんですね。洋子 そうなんです。ただ、厳しい、つらいなどという、今まで通りにしていても始まらないんだって、じっと我慢しながらも、身のまわりのどこかに糸口を見出さなければならぬんです。

生産基盤である海をきれいにして、後世まで永續する漁業を考えると、自分たちが活動を興し、その思いが本物であることを商業さん、農薬さん、林業さんたちみんなに理解してもらえようになればなあと考えています。そうした輪ができれば、色々な問題が輪の中で話し合われるようになり、地域がみんなのものとなり、みんなが地域のくらしをデザインしていくんじゃないでしょうか。日常の生活の中にある「ムダ」（たとえば飽食）をなくすることが、生活空間、生産基盤を美しくすることにつながっていくんですね。

——そうですね。状況が厳しいからこそ、糸口というものは身近にあるのかもしれないですね。それでは、みなさんの糸口さがし、むらおこの輪が地域の隅々にまで広がることを期待しながらこの辺でおわりにさせていただきます。最後に、中学生が読んだ詩を一つ添えさせていただきます。

人間は環境によって作られる

先日、新居浜青年会議所の前川義英理事長からお聞きした話である。

「まちは人によって興り、人によってつくられる。そのためには子供たちに感動する機会を多く与えたい。」

世田谷美術館から絵を借りて、新居浜市内で美術展を開いたところ、盛況であった。その絵で、子供たちの一人にでも感動を与えることができればそれでいい、と前川さんは語る。

この事業の背景には、大学時代ボクシングの全日本学生ウェルター級チャンピオンの経歴を持つ前川さん自身の体験がある。人間は鍛えれば、こんなに動くことができるのか。……高校時代に見たボクシングの試合での感動が、ボクシングを始める原点となった。

テレビで見る野球やボクシングや音楽会では、評論家を製造できても優秀なプレーヤーを作り出すことはできないであろう。

有名な演奏家のレコードより、無名新人の演奏でも目の前で聴いた時の驚きは測り知れない。大家の絵をじっと見ていると、時間を越えた天才の息づかいが伝わってくる。それは、どんな立派な美術全集で説明されるよりもすばらしい。テレビで見るプロ野球より、グラウンドで応援しながら見る田舎のソフトボールのほうがずっと生き生き見える。そしてファインプレーには、自分の体もいっしょに動いてしまう。そんなものではないだろうか。

だから、次代を担う子供たちには、本物を見る環境を与えたい。

中島町むらおこし実践大学の出雲神吉先生はこう言われた。

「成功するには、その環境に身を置くことです。優秀なセールスマンになりたければ、優秀なセールスマンの隣で酒を飲んでごらんさい。じっと話を聞いていれば自然にどうしたらいいかがわかってきます。」

本を読むことで才能の基礎を得ることができても、才能を伸ばすのは環境である。本物の環境に入らなければ本物になることはできない。

「まちづくり」でも同じではないだろうか。いくら本を読んでも感動は伝わってこない。感動のないところには行動も起こらない。まちづくりの取り組みに接し、人に接し、また自らも燃えるという繰り返しが必要であると思う。

その環境の中で、情熱や哲学や生き様を感じ取って、奥行きのある生き方をしたいものだと思う。（山本 均）

ればいいな。
来年のフェスティバルまで後一年。バーベキューまつりもそろそろマンネリ化してきた。ウエスタン風にアレンジしようとか、バーベキューそのものを違うものに替えようとか、すでに色々な意見がとびかっている。
何にしても、四国カルスト五段

高原とふるさと柳谷をないがしろにするようなことはしたくない。毎年、この四国カルストにやってきては、ふるさとを再認識している。そして、それを積み重ねていくうちに、ふるさとを愛する気持ちが強まっていくのがわかるからだ。

空は青いから 空なんよ
青くないのは 雲なんよ
海も青いから 生きている
青くなければ 生きられん

（宮本清幸）

サンセットクルーズ in 宇和島

宇和島市袋町日曜市実行委員長

田部 司



とにかく楽しい



昨年好評の納涼遊覧船に続き謝恩企画第二弾として、八月八日（土）「サンセットクルーズ in 宇和海」を実施した。二日の日曜市でのゲーム抽選による招待客、優待客、さらに一般募集の参加者を含め計一三〇名と予想を下回ったが、これは午前中雷雨注意報が出され小雨もばらついていて、参加を見合わせた人がかなりいたようだ。

昨年在船上から宇和島の夜景を見てもらおうと企画したのに対し、今年は出航時間も三十分早めて九島沖でのサンセット観賞をツアアの目玉にした。また、想い出になるように、丸太の輪切りで作った乗船記念プレート（コースターとしても使える）を渡したり、家族やグループごとに記念写真を撮り、次回の日曜市でプレゼントすることにした。

その他に、海外のクルーズの雰囲気演出するため、昨年のちょ

うちに変わり、船内のライトをブルーとホワイトの裸電球にし、音楽も、レコードからシンセサイザーによりハワイアン・メドレーを演奏した。肝心かなめのサンセットの方は、天候不良のため雲間から薄明るくこもれ陽が差した程度だったが、帰りの吉田湾周辺では、イカ釣り船のグリーンの漁火が幻想的な美しさを漂わせ、生演奏とも重なりムードを盛り上げた。

サンセット観賞、花火パレード、抽選コーナーに加え、飲食物のサービス等、二回目のイベントということですべてスムーズに進行し、事故もなく無事終了した。晴れてさえいれば、もっと夕日もすばらしく見え、参加者も多かったであろうにと残念である。けれども、昨年に引き続き参加された人や新たに若い人が増えた点は心強いし、商店街関係者の参加を制限しているの、実質的なお客さんの数は増加しているのである。

花火や夕日を無心に見入る子ども達、また、昔の遠足気分で童心に帰る大人達を見ると、このイベントも成功だったように思うし、来年は今年以上に良いものにしたと願っている。

できるだけ多くの人と心をひとつにし、喜びが分かち合えるよう、

我々は努力し続けていきたい。物の豊かさだけでは、人は満たされない。人々が求めるものは、人とのつながり、そして心を満たしてくれるもの、感動できるもの。それが袋町日曜市のテーマでもある。

気分は“これもん”



ふなむし夜市

弓削町商工会青年部

有吉唯夫



ふなむしダービー

となりました。

まずメイン会場においてのイベントですが目玉としてオークション（せり市）を、そしてその前後にカラオケ大会を企画しました。そのカラオケ大会も賞品はクジによる参加賞のみとし歌って楽しんでもらうという内容です。オークションの商品は一店一品を目標に各商店より格安で提供していただき、テレビ、スクーター等、たくさん

さんのすばらしい商店が集まりました。もう一つサブ会場でのイベントは青年会ふるさと会による「ふなむしダービー」です。これは海にどこにでも居るふな虫を各コースに分け走らせ一番早いふな虫を当てる配当に応じた商品券（当日有効）がもらえるといった大変面白い企画です。

当日は台風の影響で開催も危ぶまれたが、どうにか天候ももち無事開催となりました。オープニングセレモニーであるテープカット、雨乞踊り（無形文化財）、商工会

商工会主催の村おこし事業の一環で地域経済の振興と発展を目的とした「ふるさと夜市」も今年で二回目を迎えました。実行委員会（商工会、行政を始め各種団体二十名）の中から今年は商工会青年部長の私が委員長の大役をする事

婦人部による踊りが終ると、特産品・花火・わたがし等の出店が連なる商店街に人の波がおしかけました。

「ふなむしダービー」に歓声をあげる子供達、カラオケを聴きいる人々、オークションでいくらで買えるかと商品を物色する人達、どのイベントも予想以上の好評のうちに進み人出も二千人を数え大変な賑わいでした。

今回夜市での青年部の活動は、設営・運営等困難な事の多い事業ではありましたが、皆が楽しんで取り組めた事は本当にすばらしい事ではなかったでしょうか、今後地域に根付いた青年部活動を目指し若さと行動力で進んでいきたいと思っています。

お知らせ

えひめコンピューター
コミュニケーションクラブ

エック

時間と場所を超えたコミュニケーション、パソコン通信により市民の自主的で楽しい「ヒューマン・ネットワークの輪」を拡げるためにつくられた、えひめコンピューターコミュニケーションクラブ（略称：E・C・C・Cエック）

手持ちのパソコンやワープロを通信機替わりに使って、ホスト局と呼ばれるセンターのコンピューターと結び、これを仲介してお互いに情報の交流をする。このような形がパソコン通信ネットワークと呼ばれるコミュニケーションシステムである。

パソコン通信ネット「TOWNタウン」は、ひとつの街をイメージしたもので、人との出会い、ふれあい、情報交流の場となっている。

〒790 松山市道後一万1番2号

（財）愛媛県まちづくり総合センター内

TEL (089) 351-5557、FAX 351-5560

担当：山本、都築、田村



村おこしの原点を見る！

大分県・下郷農協見聞記（その一）

（財）愛媛県まちづくり総合センター

井口 浩志

アブラ蟬の泣きしぐる昭和六十年八月の暑い日、私たち三人（山本、井口、田村）は、昭和四十八年頃から有機・無農薬農業に取り組み、消費者との産直、都市消費者との交流などで素晴らしい村おこし活動を展開している大分県日田郡耶馬溪町の下郷農協（奥登組合長）を訪問した。

下郷農協は、福沢諭吉の故郷・大分県中津市からバスに乗ること約一時間半、耶馬溪谷で有名な耶馬溪町の下郷地区（旧下郷村）にある。下郷地区は典型的な山村集落で、あちこちに火山性の奇岩がそびえ、平坦地は少ないが、なんとなくあたたかい雰囲気のとところである。

「うちの農協」と自慢する民宿のおばさん

午後四時ごろ「下郷」というバス停で下車した三人は、あらかじめ農協の市村参事に手配をお願いしておいた民宿へ向かうことにした。近所の人に民宿の所在地を聞くと、またハキロもあるとのこと。市村参事の「すぐ近くにある」との言葉を思い出し、三人で大笑いをしたものである。

まず、民宿で驚き感心したのは夕食の時である。色々な料理をたくさん出していたのだが、焼肉の肉にはじまり、タレ、野菜、漬物、ウィンナー、お茶にいたるまでほとんど農協で作ることのこと。

おまけに民宿のおばさんは「うちの農協が、うちの農協が」と自慢すること此の上無い。私たちはアッケにとられるやら感心するやら。明日の農協訪問が楽しみであった。

朝から活気あふれる農協

翌朝私たち三人は、始業時間のかなり前に農協へ到着したため、近くをブラブラ歩いていたが、ほどなく「下郷農協」と大きな文字

をポスターに書いた保冷車が三台、四台と到着し、色々な品物を積み込みはじめた。後で聞くと、その保冷库は北九州を始め、中国・四国方面、大阪方面へと下郷の食品を運送することであった。また、小さな農協（組合員四百二十二人）の割には出勤する職員の数が多いようであった。これは、雇用の場を積極的に提供していたためであった。



消費者と命とくらしを守る交流



食品加工場

過疎も後継者不足も
嫁不足もない！

下郷地区は、昔から「小作村」と言われるほどの貧乏村であった。戦後、長野県を中心に全国から開拓移住者が入村し、今でも山の中高地帯で主に酪農を行っている。昭和六十二年九月一日現在の地区人口は二、三八四人（老人ホームの七七人を含む）、地区世帯数は六九三所帯（同七三所帯を含む）となっている。なお、耶馬溪町全体の人口は六、九二七人。世帯数

は一、九七一所帯である。

下郷地区の農家一戸当たりの平均耕地面積は五十六アール（酪農の飼料畑を含む）と狭小であるが、酪農・養鶏・肥育牛・養豚・野菜・果樹・稲作・茶・シイタケ・タバコなど多分野にわたり農・林・畜の複合経営を行っており、多品目少量生産である。

耕地面積内訳は、水田七〇ヘクタール、畑三〇ヘクタール、樹園一〇ヘクタール、飼料畑六〇ヘクタール、草地一五ヘクタール、その他二〇ヘクタールとなっている。

野菜、果樹、茶は一部の例外を除いて化学肥料も農薬も一切使用していない。乳牛は飼料の七割が牧草で、半日は運動させる。養豚は生産効率は落ちるが肉質のいい黒豚を無添加飼料で育てている。

今では、後継者難や嫁不足とは縁が切れ、また耶馬溪町の人口が減少する中で、下郷地区の人口減少はほぼ歯止めがなかった。また農協への信頼度を表わすように、組合員の新規加入も増加し続けている。これは少量の農産物でも快

く引き受けてくれる農協の姿勢によるものである。またここ数年、下郷農協の取り組みに魅せられた他府県からの脱サラ農家の移住も行われている。

下郷農協の概況

昭和二十三年に農協設立。役員は組合長一名。理事九名。幹事三名である。機構は参事のもとに企画会議があり、管理部（管理係・金融係）、生活部（生産資材部・生活資材部）、農産工場（農産工場・牛乳工場）、食肉工場（食肉加工肉）、生産産直部（輸送係・指導販売係）、きのこセンター、北九州出張所からなっている。

特にユニークなのは加工事業で、農協が手がける二次加工品も牛乳・食肉・ウィンナー・ハム・ベーコン・焼豚・スモークドチキン・バター・脱脂粉乳・マヨネーズ・味噌・漬物・豆腐・大豆マヤシ・コンニャク・ハト麦茶など食生活全般にわたっている。もちろん全部、無添加・無着色である。

このように特色のある取り組み

は、過疎や後継者不足、また嫁不足に悩む町村にとって非常に興味深いものがある。

	下郷農協	全国平均
組合員数（人）	422	1,800
職員（臨時含む・人）	81	69.2
購買事業（百万円）	430	1,098
販売事業（"）	490	1,526
加工事業（"）	1,027	191
貯金（平残・"）	1,641	5,738

（注）下郷農協は昭和60年度、全国は59年度。

（つづく）

なお、今年の十月二十三日（金）午後七時から、中山町佐礼谷公民館において下郷農協の市村参事の講演があります。詳しくは中山町佐礼谷支所の井上支所長までお問い合わせ下さい。

☎〇八九九（六八）〇〇〇一



地域づくり研究会設立 世話人会

まず…何のために
設立するかな？

(岩城にて)



お知らせ



“頑張ってみませんか”

(仮称)【えひめ地域づくり研究会議】結成を目指して

素晴らしい明日の地域を求めて、地域を愛し、地域づくりをライフ・ワークとする人が、ともに結び合い、ともに学び合い、お互いの地域を生き生きさせる切っ掛けを創ってみませんか。

1. この会は——◎ 「地域づくりに関心を持つ住民すべての人」で組織し、誰でも参加出来ます。
◎ この組織は、お互いが、情報を提供し合い、個々の役割、ノウハウを学び合いながら、実践を通して地域を考えようとするための集団です。
2. 活動は——◎ 各地で行われている「地域づくり」の実態を、情報として交換し、公開します。
◎ レター・ニュースによる情報交換。
◎ シンポジウム、フォーラムを開催します。
◎ 課題別に学習活動を深めます。
3. 設立総会は——とき：昭和62年11月14日(土)・15日(日)午後3時から
ところ：喜多郡内子町 内子座
4. 申し込み先は——愛媛県まちづくり総合センター内
えひめ地域づくり研究会議設立事務局
(TEL 0899 25-5557)
〒790 松山市道後一万1の2

※ これまでの経過

県下各地で今日的に進められている「まちづくり運動」や、全国的なその動きの中で、まちづくり活動に関心を持ち、あるいは自らが行動する人たちが増えています。しかしながら個々の市町村の間には情報の交流システムがなく、「いま、どこで、誰が、何をしているか。」を求め合う声は少なくありません。

(仮称)「えひめ地域づくり研究会議」は、このような状況を受けて、本年5月に久万町で有志を募りながら、愛媛県まちづくり総合センターの協力のもとに発起人会(30余名)を結成し、誰でも参加できる組織づくりのための準備を進めてきました。今後の活動については種々課題も多く、入会していただく皆さん方の協力のもとに、設立総会並びに今後の活動の中で充実させていく予定です。

レターネットワークینگえひめのグレードアップ版として

まちづくり活動の情報紙としてのこの「舞・たうん」を今月から隔月で発行するようにしました。

皆様からのレター通信紙として活用下されば幸いです。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどんなお寄せ下さい。

「舞・たうん」編集係

二人のGAL(都築・

田村)まで

〒790 松山市道後一万一の二
(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 〇八九(二五) 五五七

FAX (三五) 六六〇